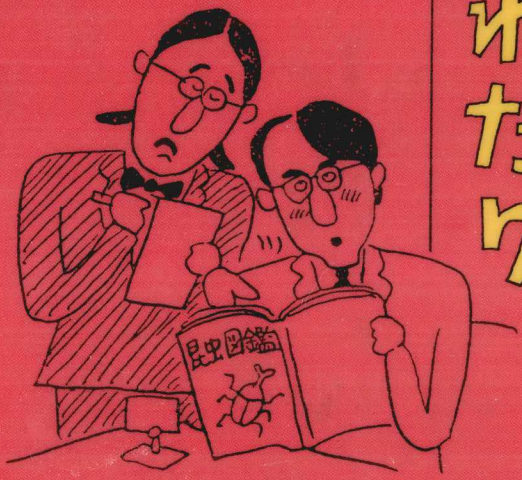
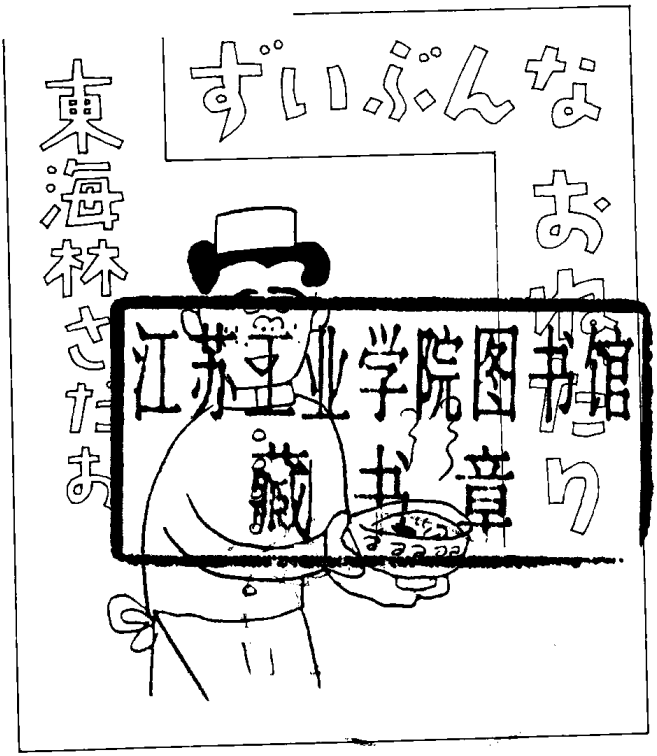
すいぶんなおねだり

東海林さだお





文藝春秋

ずいぶんなおねだり

一九九七年三月二十日　第一刷

著者　東海林さだお

発行者　新井　信

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話　東京（三二六五）一二一一

郵便番号　一〇二

印刷所　凸版印刷

製本所　中島製本

＊万一落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取り替えいたします

＊定価はカバーに表示してあります

©Sadao Shoji 1997

Printed in Japan

ISBN4-16-352690-0

ずいぶんなおねだり・目次

夏休み昆虫観察日記　7
夏休み昆虫観察日記　Ⅱ　24
B級の鉄人との対話　41
五月の病い　57
グルメ姫ライター大いに語る　72
ゲイバーの中のおばさんたち　88
なんとなくクラシテル　104
プロ野球消化試合の実態　119

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

江川紹子かく語りき　135
ハトヤ大研究　152
携帯電話は悪者か　168
草井是好氏のクサイ話　184
イチャモン　206
コンビニ日記　223
悪口とツーハンはやめられない　239
——ナンシー関さんと語る

装幀　和田　誠

ずいぶんなおねだり

夏休み昆虫観察日記

■アリ

多くの昆虫は住所不定だ。
セミもトンボもカブト虫も、トノサマバッタもカミキリ虫も、特に決まった住所はない。
だがアリには住所がある。
ところ番地だってはっきりしている。
郵便番号だって、言えと言われれば言うことができる。
しかも土地付きである。
クモやハチなども、決まった住所があることはあるが、空中にあるせいか〝住所〟とい

う印象が薄い。

アリは昆虫でありながら土地付き住宅に住んでいるのだ。

それもこれも、他の昆虫が遊んでいるときに、休みなく働いてきたせいなのだ。

アリは日曜日何をしているのだろうか。

ゴロ寝、散歩、ジョギングなどをしているのだろうか。

しかし、アリがゴロ寝をしているところを見た人はいない。

散歩しているのを見た人もいない。

アリはいつだって急いでいるし、働いているところしか見たことがない。

ハエなんかは、けっこう日向ぼっこもするし、体の清掃をしながらくつろいでいる。

アリが日向ぼっこをしているのを見た人がいるだろうか。

アリたちが最大の美徳としているのは労働である。

衣服も労働を旨として作られている。

汚れの目だたない黒を選んでいるところはさすがだ。

これがもし白だったら……。

土中の生活の多いアリは、作業着の清掃に時をとられ、その分労働時間が減ることになる。そのあたりのことを、きちんと考えているのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

夏休み昆虫観察日記

全員、揃いの労働着で、人によってユニフォームが違うということもない。

そのほうが余計なムダが省けるからだ。

誰を見ても同じデザイン、同じ色。

あれでよく相手を見分けられるものだと思うかも知れないが、彼らは見分けたりはしていない。

見分けたところで何のメリットもない。

相手が「アリだ」とわかればそれでいいのだ。

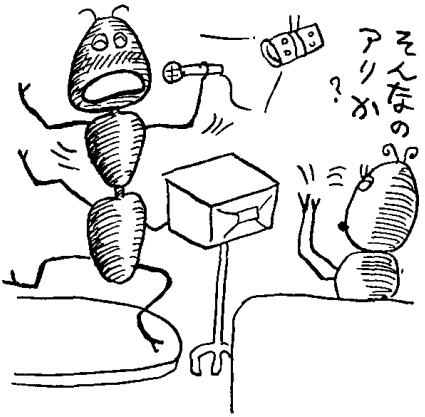
アリは礼儀も正しい。

アリ同士、出会うと立ちどまってきちんと挨拶をする。誰だかわからないのにきちんと挨拶をするところが偉い。

夏の夕方、陽が沈んであたりが薄暗くなってからも、まだ働いているアリをよく見かける。

アリは残業もいとわないのだ。

勤勉、寡黙、礼儀正しく、貯蓄に励み、秩序を守り、階級を遵守する。
良民。まさに良民である。
イソップにもいろいろと可愛がられ、この世の春を謳歌してきた。
いままではこれでよかった。
思えばいままではアリの時代であった。
だが世の中は、時代とともに大きく変わる。
いま、労働に対する価値観が大きく変わろうとしている。
働き過ぎは、世界中の非難の的となっているのだ。
労働時間の短縮は世界の趨勢(すうせい)である。
そういう時代の流れのなかにあって、労働一本で生きてきたアリは、この事実をどう受けとめているのであろうか。
アリといえども、世界の流れにさからって生きていくことはできない。
時代の流れを、己れの生活の中に取り入れていかざるをえないのである。
どう取り入れていったらいいのだろうか。
とりあえず、まず取り組まなければならないのは時短であろう。
時短によって手に入れた時間を、アリはどうやって過ごすつもりなのだろうか。



とりあえずゴロ寝であろうか。

週休二日制になったら、アリはどうするつもりなのだろう。

とりあえず、キリギリスのところへ行って教えを乞わなければならない。

■セミ

セミは少しいい気になっているところがある。

増長しているのである。

増長して大声でわめく。

あんなに大きな声で鳴く昆虫がほかにいるだろうか。

コオロギもスズムシもキリギリスも、草葉の陰で、周囲を気にしながらひかえめに鳴いている。

聞いていて少しもうるさくないし、思わずし

んみりすることもある。

深夜、小用に立った便所の片隅で、コオロギがかぼそく鳴いていることがある。

その声をじっと聞いていると、俺の人生はこれでよかったのだろうか、と反省と悔恨の涙が頬を伝わることさえある。

コオロギの声にはそのぐらいの力がある。

しかるにセミはどうか。

草葉の陰どころか、頭上であたりかまわず大声で鳴き、ジジジジと飛びまわり、あまつさえついでに人間の頭に小便をかけたりする。

傍若無人とはこのことである。

あの鳴き声は何フォンに相当するのか知らないが相当のボリュームがある。

いまのところ、セミは夏だけしか現われないからいいが、もし一年中飛びまわって鳴かれたら、大抵の人は怒り出すにちがいない。

都会の団地の主婦あたりからは、当然苦情の電話が警察などに殺到し、警官は毎日セミ捕りに出動しなければならなくなる。

その声に多少の芸術性でもあれば救われるのだが、セミのメロディは単調でうるさいだけだ。

一生黙ったまま死んでいく昆虫もたくさんいるというのに、セミはなぜああもうるさく、ああも傍若無人にふるまうのであろうか。

古代ギリシャでは、セミは聖虫として敬われていたのである。

ホメロスさんなんかが、

「いきなり土の中から生まれてくるところが崇高である。神と同じく血を持たないから高徳である」

などと提唱しておだてたものだから、セミはいい気になってしまった。

中国なんかでも、

「セミは露を飲んでものを食べない。その姿は清らかで尊い」

などと評判になって、セミはますます増長してしまった。

日本でも孝徳天皇のときに、セミのマーク入りの冠をつくって、
「これは至高である」
ということになったので、セミの夜郎自大に拍車がかかった。
それ以前のセミは、いまでは誰も信じないであろうが、謙虚、朴訥で有名であった。
含羞、引っこみ思案でも有名であった。
いまでもそのころの習癖をかいまみせることがある。
鳴いてないときのセミは実に謙虚だ。
何だか照れくさそうにしている。
照れかくしにモゾモゾ動いたり、極まりわるそうにゴソゴソと人を避けたりしている。
おだてられてからのセミはまったくの自堕落になった。
セミは腹部全体が楽器になっている。
発音節から出た小さな音を、腹部のホールで共鳴させ拡大する。
他の昆虫たちから見れば、教会のパイプオルガンのようなものであろう。
これだけの装置を有していながら、かなでる音はミンミン一種である。カナカナ一種である。
パイプオルガンがありながら、ハトポッポしか弾けないのと同じだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook